

卷頭言

〈小特集〉 間文化性と宗教

Special issue: Interculturality and Religion

2019年3月17日、立命館大学（衣笠キャンパス）にて、間文化現象学ワークショップ「間文化性と宗教」が開催された。

これは、毎年開催している間文化現象学研究センター主催のワークショップの一環である。センターは、科研費（基盤B）「間文化性の理論的・実践的探求——間文化現象学の展開」（代表：加國尚志・本学文学部教授）の計画にもとづいて、2014年度にワークショップ「視覚と間文化性」を開催して以来、「制度」「エコノミー」「倫理」というテーマでワークショップを開催し、考察を深めてきた（「視覚」については本誌108号、「エコノミー」については本誌114号に論考が掲載されている）。

最終年度となる2018年度は、「宗教」を主題とした。前年度の「倫理」と同様、間文化性についての哲学的・理論的考察を、実践的な領域へと広げる試みである。

オーガナイザー兼司会を務められた川瀬雅也氏が、ワークショップの冒頭で述べた今回のテーマの趣旨を、以下に紹介したい。

科学技術が席捲した現代社会においては、宗教は、「古くさい精神の遺物」、「いんちき」、「価値のないもの」、「単なる個人的な信仰の問題」などと、世間的にはあまりまともに取りあげられていない。しかし——先日、東日本大震災から8年経ったが——ああした大災害のような、人が圧倒的な力のもとに為す術もないということが、まさに現代社会においても生じ、しかも、それが人の人生そのものを、物理的なだけでなく、

精神的な面からものがらっと変えてしまうことがある。

そうしたときに、地震のメカニズムや、行政の危機管理などという問題とは全く別に、「信じる、祈る、愛する」というような精神的な営みが、個々人の人生において、本当に大切になってくるのであって、そこには、やはりある種の宗教性があるのではないか。そしてそれは、震災のような災厄においてのみ人間に必要なものなのではなく、とりわけ科学技術が席捲する現代社会においては、普段でも、気づくことは多くなかったとしても、人間の生にとって大事な意味を持つものなのではないか。

また、現代社会というのは、科学技術などによってグローバル化がひろまり、国境の垣根が低くなっていくのと呼応するように、地域性や民族性への強い愛着心も表面化してきて、諸々の文化の「あいだ」ということに対する問いも多方面から発せられているような時代である。

今回は、そうした間文化性が問題となる現代社会のなかで、宗教性の意味について、どのように考えるべきなのかを、じっくりと考え直す機会を提供できたらと思う。

以下に掲載するのは、ワークショップの提題者である川瀬氏、野間俊一氏、古荘真敬氏の各論文と、小田切建太郎氏の個人研究発表の論文である。ワークショップでは、各氏とも、それぞれの専門にもとづいて、大変興味深い議論を展開していただいた。同時に、宗教というテーマの難しさから、それぞれの専門という枠を突破して、非常に豊かな問題提起をされている。

朝日新聞に情報が掲載されたこともあって、当日は一般からも多数の参加者が来場して会場が一杯になり、最終年度にふさわしい熱気のコもったワークショップとなった。これで科研費にもとづく5年間の研究活動は一旦の終了となるが、今後も、これまで培ってきた研究交流や研究活動の成果をもとに、新たな研究を展開していきたい。

立命館大学文学部・准教授
亀井 大輔